

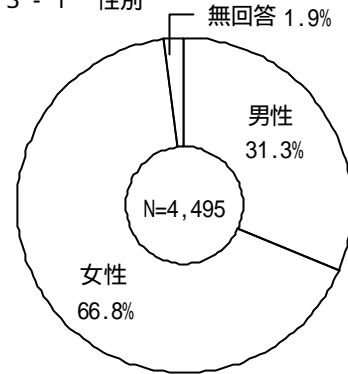
## 第2 調査結果

### 1 基本属性

#### (1) 性別・年齢別

調査対象者の性別は、男性が31.3%(1,407人)、女性が66.8%(3,003人)と、女性が3分の2を占めています(図3-1)。

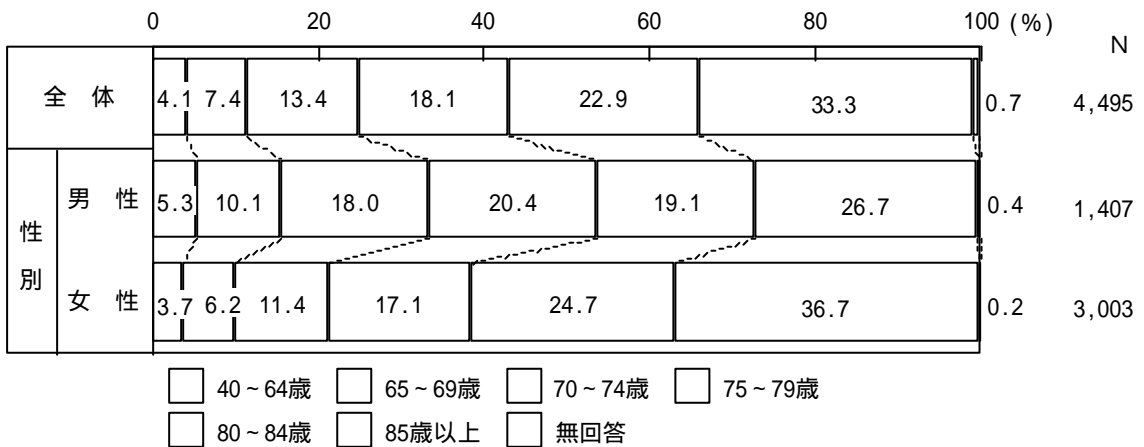
図3-1 性別



年齢別にみると、40～64歳の特定疾病に該当する人が4.1%(186人)、65～74歳の前期高齢者が20.8%(934人)、75歳以上の後期高齢者が74.4

%(3,343人)となっています。男性が75歳未満33.4%、75歳以上66.2%に対して、女性は75歳未満21.3%、75歳以上78.5%と、75歳以上の比率は女性が高くなっています。特に85歳以上の女性は、女性全体の36.7%を占めています(図3-2)。

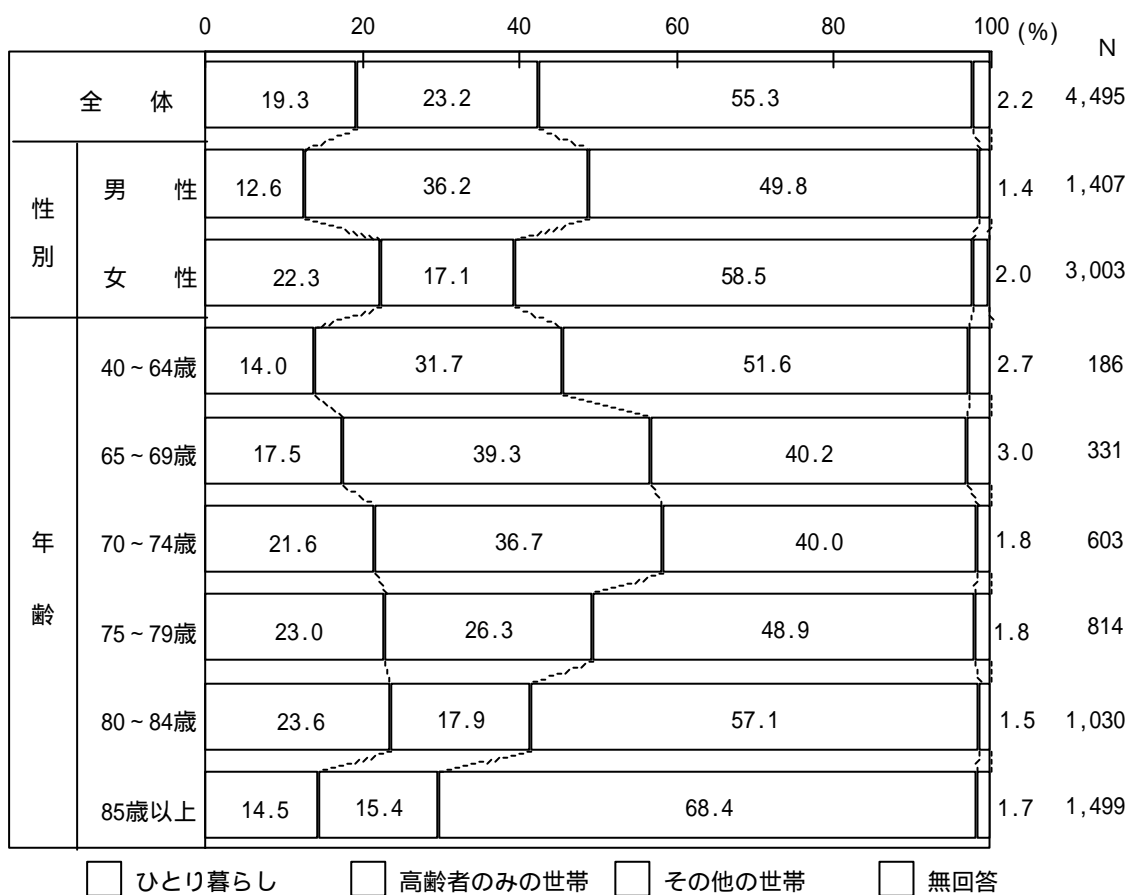
図3-2 性別・年齢別



(2) 家族構成

家族構成は、「ひとり暮らし」が19.3%、高齢者夫婦世帯などの「高齢者のみの世帯」が23.2%、子どもの家族など同居している「その他の世帯」が55.3%となっています。「ひとり暮らし」は女性が高く、年齢区分では80～84歳の23.6%をピークにしており、「高齢者のみの世帯」は男性が高く、年齢区分では65～69歳をピークとしています。本設問に「60歳の本人と59歳の妻と娘」と添え書きされた人がいました。

図3 - 3 家族構成

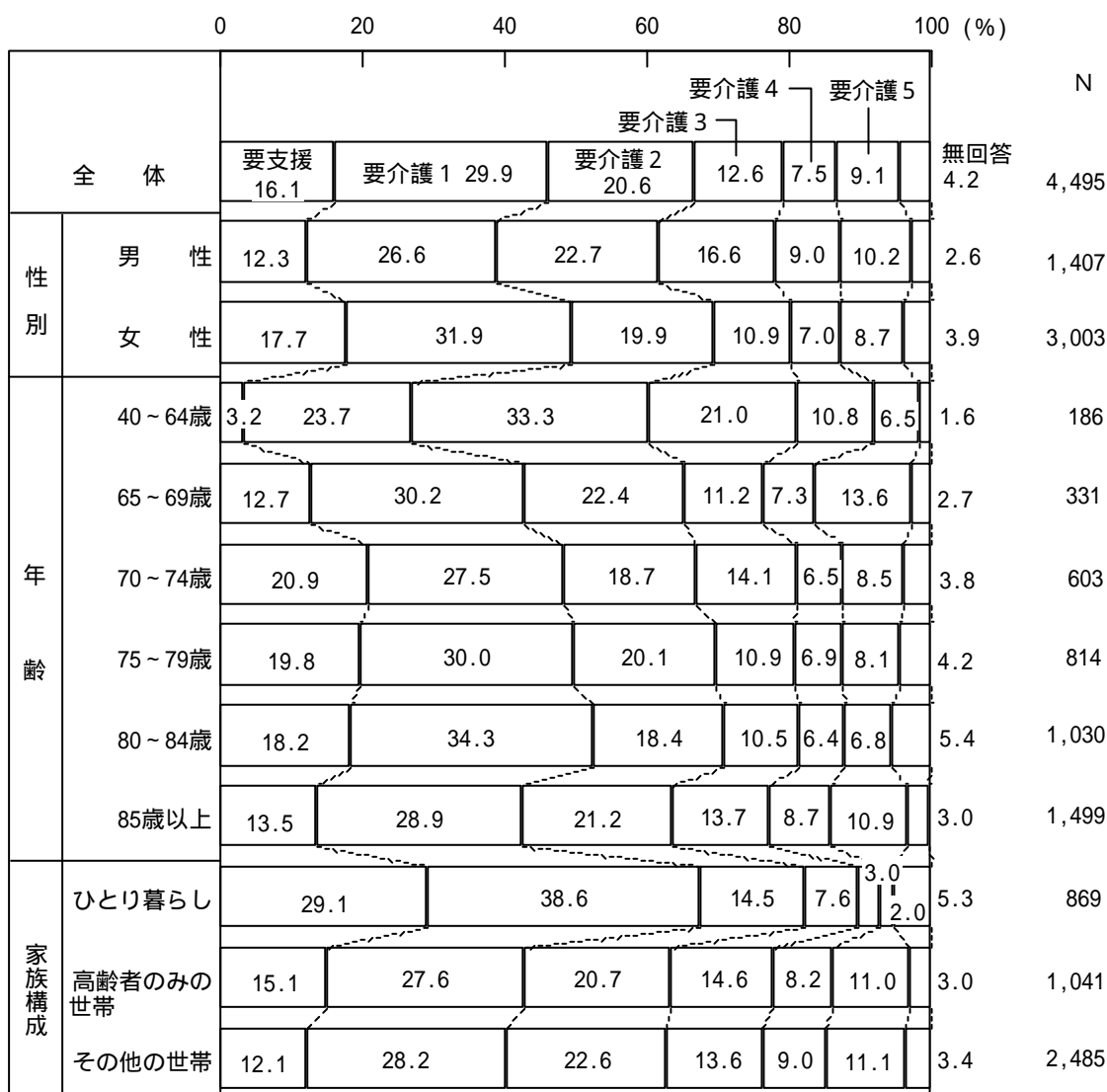


(3) 要介護度

要介護度は、「要介護1」(29.9%)、「要介護2」(20.6%)、「要支援」(16.1%)、「要介護3」(12.6%)、「要介護5」(9.1%)、「要介護4」(7.5%)の順になっています。女性より男性が重い傾向がみられ、家族構成別ではひとり暮らしの軽度の比率が高くなっていますが、要介護3～5の重度が12.6%(109人)もおられます。

本設問の欄外に「介護が必要になったとき、認定をとっておかないと間に合わないからと言われ、とりました」などの添え書きがありました。

図3-4 要介護度

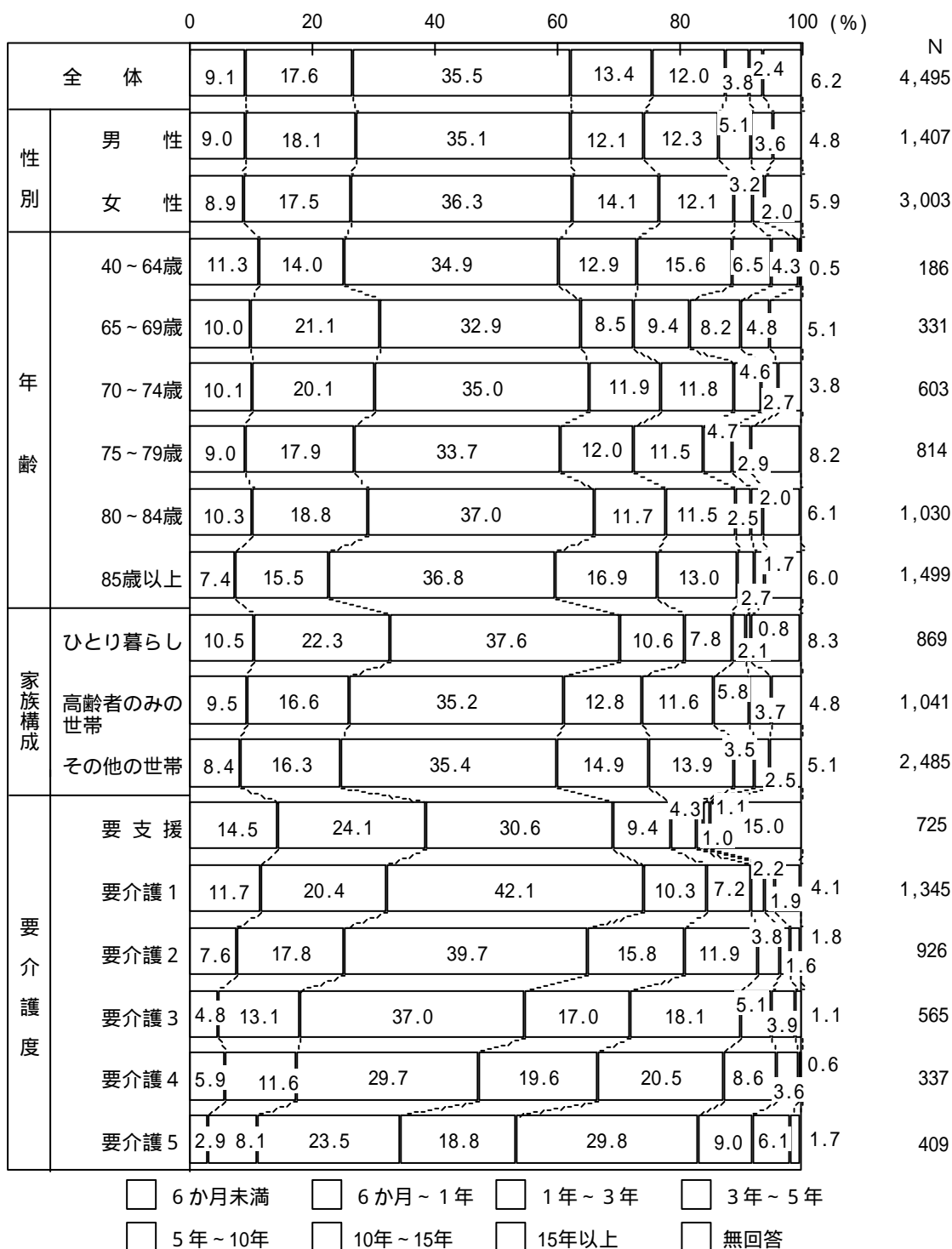


## 2 介護が必要になった期間と主な原因

### (1) 介護期間

介護が必要になった期間は、「1年～3年」(35.5%)が最も高く、次いで「6か月～1年」(17.6%)、「3年～5年」(13.4%)となっています。「15年以上」(2.4%)の人が110人もいます。5年以上は女性より男性が高く、要介護度別では重度ほど介護期間が長い傾向がみられます。

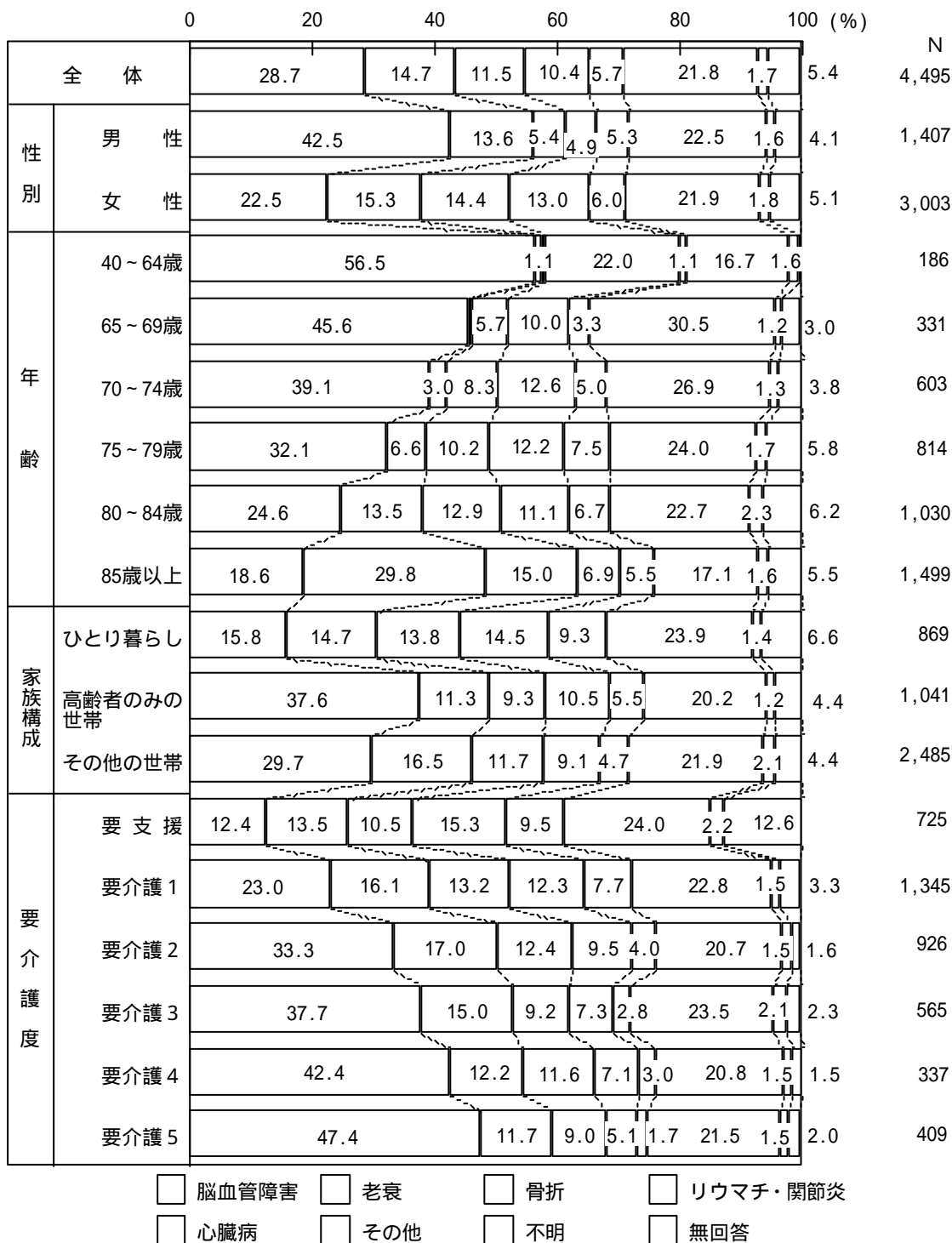
図3-5 介護期間



(2) 介護が必要となった主な原因

介護が必要となった主な原因としては、「脳血管障害」(28.7%)が最も高く、次いで「その他」(21.8%)、「老衰」(14.7%)、「骨折」(11.5%)などとなっています。「脳血管障害」は男性が高く、「老衰」「骨折」「リウマチ・関節炎」は女性が高くなっています。「脳血管障害」は、年齢別では若年齢層、要介護度別では重度ほど高くなっています。「老衰」「骨折」は、高年齢層ほど高くなる傾向がみられます。

図3 - 6 介護が必要になった主な原因



「その他」として多くの病名等が記載されていました。次表はその病名等を分類したものです。

表3 - 1 選択肢になかった病名等

分 類	病 名 等	件数
新生物(がん)	大腸がん(6) 前立腺がん(4) 胃がん(3) 子宮がん(3) 咽頭がん(2) 直腸がん(2) 乳がん(2) 膀胱がん(2) 肺がん その他のがん(9)	34
血液及び造血管の疾患並びに免疫機構の障害	貧血(症)(3) 再生不良生貧血	4
内分泌、栄養及び代謝疾患	糖尿病(44) 高脂血症	45
精神及び行動の障害	痴呆(132) うつ病(6) 精神的疾患(2) 精神病(2) 物忘れ(3) 知能障害 心労 精神分裂症 昼間のひとり生活 老人性うつ病 理解判断力の低下	151
神経系の疾患	パーキンソン病(78) アルツハイマー病(42) 神経痛(8) 座骨神経痛(5) 脊髄小脳変性症(6) 脊髄損傷(5) 手足のしびれ(4) 脊髄の疾患(4) 脳挫傷(4) 半身麻痺(3) 脳性麻痺(3) 小脳変性症(3) 脊髄空洞症(2) 自立神経失調症(2) 脊髄性小児麻痺(2) 脳腫瘍(2) てんかん 下半身マヒ ギラン・バレー症候群 アルコール性ウェルニッケ脳症 立ちくらみ 顔面神経麻痺 髄膜炎 脊髄分離症 先天性脊髄分離症 不安神経で発作が起き外出ができない 頸髄症 脳外傷 脳神経障害	186
眼及び付属器の疾患	失明・全盲(13) 視力低下(8) 眼病(5) 視力障害(5) 緑内障(4) スモン(2) 極度の近視と眼底出血 白内障 糖尿病性網膜症 網膜剥離	41
耳及び乳様突起の疾患	めまい(2) 難聴(2) メニエール病 後天性全聾 耳疾患 耳鳴り 聴神経腫瘍	9
循環器系の疾患	高血圧(16) 腎臓病(8) 脳梗塞(8) 腎不全(8) 人工透析(7) 心筋梗塞(2) 大動脈解離(2) 在宅酸素(2) 動脈瘤(2) 起立性低血圧 狭心症 慢性腎不全 大動脈瘤 静脈瘤 大動脈弁膜病 動脈硬化 脳出血 腎臓 疲労・心臓肥大 不整脈 腹部動脈瘤	67
呼吸器系の疾患	肺気腫(29) 呼吸器機能障害(8) 肺疾患(病)(8) 肺炎(7) 喘息(6) 結核後遺症(3) 呼吸不全(2) 肺の手術後(2) 気管支炎 肺気腫 気管支喘息 気管支拡張症 低肺機能障害 風邪 慢性呼吸不全 肺 肺塞栓 肺腫瘍 肺線維症 胸膜炎	77
消化器系の疾患	胃の切除(5) 胆石(4) 腸閉塞(3) 肝臓病(3) 胃潰瘍(3) 肝硬変(2) 胃 膵臓、胆のう、十二指腸を切除 胃腸病 人工肛門 腸の欠陥 腸閉塞、肝腫瘍、慢性肝炎 直腸手術後 内臓手術 膵臓手術	29
皮膚及び皮下組織の疾患	ヘルペス(2) 帯状疱疹 日光アレルギー	4

分 類	病 名 等	件数
筋骨格系及び結合組織の疾患	腰痛(35) 骨粗しょう症(30) 歩行困難(14) 足腰の痛み(6) 股関節痛(5) 膠原病(5) 脊柱管狭窄症(5) 筋萎縮性側索硬化症(ALS)(4) 脊椎損傷(4) ヘルニア(4) 関節機能の低下(4) 股関節の術後(4) 腰が曲がった(4) 頸椎損傷(4) 圧迫骨折(3) 後縦靭帯骨化症(3) 足が痛い・不自由(3) 膝関節痛(3) 歩行障害(3) 頸椎症候群(2) 膝の痛み(2) 体幹機能障害(2) 椎間板ヘルニア(2) 変形股関節(2) 肩痛 痛風 上下肢障害 化膿性脊椎炎 股関節機能全廃 股関節骨頭がすり減ったため もともと足が弱かった よくつる 関節痛 頸椎症、腰椎狭窄 原因不明だが歩行できない 股関節左右変形 股関節置換手術 腰椎頸椎 骨 骨にヒビが入っている 両足切断 左手不自由 人工股関節 足・目の不自由 多発筋炎 背骨の手術を受けたため歩行困難 背骨の痛み 背骨移植による障害 脊柱側弯、股関節変形 膝の変形 膝変形性関節炎 変形性脊椎 頸椎、腰の病気 頸椎手術の後遺症 五十肩 脊椎変形	185
尿路性器系の疾患	腎不全 前立腺肥大 尿毒症 膀胱を切り取りストマをつけるようになってから 膀胱を切除してから	5
損傷、中毒及びその他の外因の影響	足首骨折 外傷により腕切断 アルコール中毒 頭蓋骨骨折	4
傷病の外因	交通事故(13) 手術後の後遺症(8) 転倒(7) 入院後(2) いすから落ちて足腰を痛めて後 産業事故 自転車で転倒 自動ドアに首を挟まれた 戦傷者 打撲 入院中の転倒	37
その他	身体障害(者)(5) 配偶者の死亡により(3) 高齢のため(2) 障害(2) 病気(2) その他の病気 ひきこもり 気分的なもの 運動不足(本人の不摂生) 緊急時 近所の浴場の廃業 子どもがひとり立ちしたため 自立困難 掃除、食事が作れなくなった 体の不調 通院に困った 頭の病気 動作に時間がかかる 特定疾患 疲労 必要ないのだがデイサービスを受けたいため 病院で歩けないようにされたから 不安 自分(介護者)がほっとする時間がほしい	33

(注) 「病名等」欄の( )内の数字は件数、( )がないものは1件である。

### 3 要介護認定

#### (1) 訪問調査員の対応

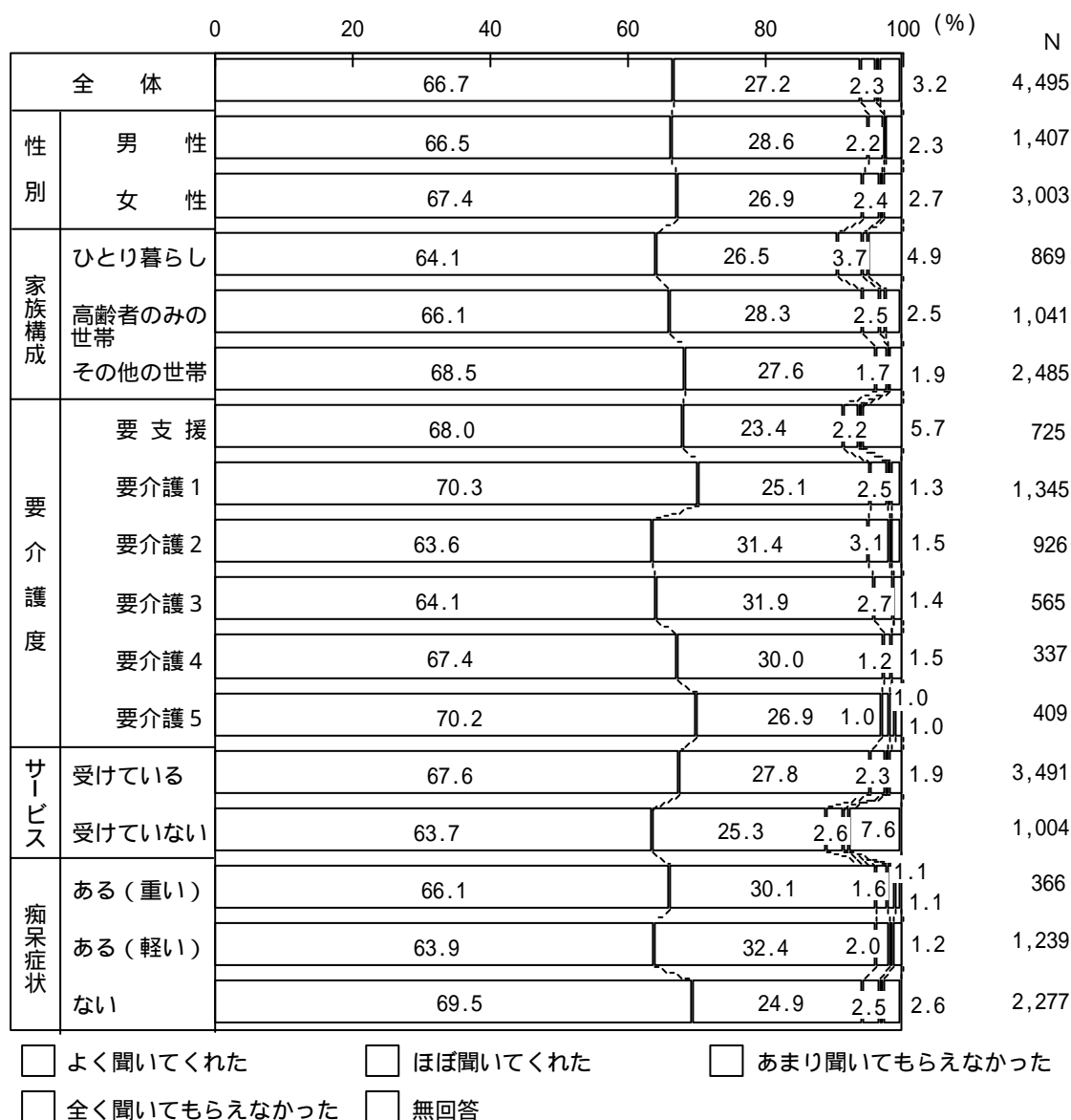
「要介護認定の訪問調査員は本人や家族の話をよく聞いてくれましたか」という設問に対しては、「よく聞いてくれた」と「ほぼ聞いてくれた」を合計すると93.9%にもなり、本市の訪問調査員は話をよく聞いてくれたといっても差し支えないようです。本設問の欄外に次の添え書きをした人がいました。

私宅の場合、とてもいい方に来ていただきありがたく思っております。

今回は夫婦で来られた。介護機器のセールス目的に近い感じがしました。

調査員によって聞き方、内容等が違いすぎ。どのように答えて良いかわからない。例えば、「異常行動がありますか?」と言われたとき、異常行動とは何を指すかわからない。具体的に聞いてくれる人もある。

図3 - 7 訪問調査員は話をよく聞いてくれたか





## (2) 要介護認定に対する評価

要介護認定に対する評価としては、「妥当である」(61.4%)、「わからない」(20.9%)、「軽すぎる」(10.8%)などとなっています。「重すぎる」(0.8%)と答えているのは、わずか34人です。

性別・年齢別ではさほどの差異は認められません。家族構成別では、「妥当である」が高いのはその他の世帯、逆に低いのはひとり暮らしです。要介護度別にみると、重い人ほど「妥当である」が高くなる傾向がみられます。居宅サービスを受けていない人は受けている人より、「妥当である」が低く、「わからない」が高くなっています。また、痴呆症状が重い人ほど、「軽すぎる」「妥当である」が高く、「わからない」が低くなっています。

本設問の欄外に以下の添え書きをした人がいました。

要介護2から3になったとき、要介護の度合いが少し重いかと思った。

8月まで受けていた。

現在入院中でわからない。

一時悪いときがあったが、現在はまあまあである。

他の人の場合がわからないため何とも言えない。

図3 - 8 要介護認定に対する評価

